

群馬菱の実会だより

http://www18.ocn.ne.jp/~hishimig/

平成22年 幹事&カラオケ愛好会の研修旅行記 (2月19・20日)

今年の研修場所は群馬県内東吾妻町の岩櫃山麓、「ホテル コニファーいわびつ」で実施しました。参加者は女性6名を含む23名、19日ホテル差向けのバスに乗って会社を出発、雪がほんの少し残っているホテルに到着、昼食後室内グランドゴルフを競い合いました。ホテルからの賞品を受取ってニコニコ顔の皆さん！そして次は温泉をじっくり堪能してからの宴会、二次会(カラオケ)と楽しい夜が過ぎて行きました。ホテルはバリアフリーの杉材を豊富に使ったゆったりすっきり宿でした。

翌日は「菱の実会を考える」をテーマに研修を実施、皆さんから合計70件余の意見を頂きました。後ほどそれらをまとめて、「群馬菱の実会」今後の活動に反映してゆきたいと思えます。

帰途は子持「道の駅」や今井宿に立寄ったり、きれいな山並みの景観を楽しみながらの、天候に恵まれた研修旅行でした。
(境野 記)



がんばってます！

①

前号でご案内いたしましたこのコーナーのトップバッターとして細野さんの「がんばってます!」をご紹介します。このように、趣味や特技を生かして地域活動や慰問活動をやられている方。国家資格や各種検定資格を取得されたり目指している方。叙勲・表彰・入賞・出版された方。定年後も新天地で現役として勤めている方。新しいことや体力づくりに取り組んでいる方等がんばっている方がたくさんおられると思います。

自選他選を問いません。遠慮せずにご連絡下さい。よろしくお願致します。



はじめ、近隣自治体にも出掛けて演奏している。細野さんは「参加者に喜んでもらえるだけでなく、自分も楽しめるので続けられた」と笑顔で話していた。
(粕川康弘)



太田市の緑町集会所で高齢者らの交流を目的として開かれた集会「いき

太田 歌で交流 細野さん

東京新聞

いきサロン」。同市宝町の自称「歌声メッセンジャー」細野孝雄さん(66)がキーボードの演奏などを披露した。写真。参加した約四十人が「青い山脈」などの懐メロを合唱して楽しんだ。細野さんは大手電機メ

「カー社員として世界中を駆け回っていた。定年退職を機に「地元に戻す」と自治会活動に参加したが、ある集会で参加者が「こんな会、つまらない」と漏らしたことに奮起。趣味のキーボード演奏を生かし、演奏会を続けている。

ライブは既に百回を数え、評判に。三百曲以上のレパートリーがあり、月に五、六回、市内をはじめ、近隣自治体にも出掛けて演奏している。細野さんは「参加者に喜んでもらえるだけでなく、自分も楽しめるので続けられた」と笑顔で話していた。

【 会員投稿 】 謎のインカ帝国 : ペルー旅行記

大槻伸次

<7日目>

【写真は、浮島のウロス島にて民族衣装を借りて】

朝一番、汽船に乗ってチチカカ湖に浮かぶウロス島へ。チチカカ湖は汽船が航行する湖としては世界最高地点(3,800m)です。その大きさはなんと琵琶湖の12倍あり南半分はボリビア領です。このウロス島は浮き島で、地面はないのです。…というのは湖に生えている「トラ」という葦の一種の根塊を50センチ平方のブロック状に切断し、そのブロックを平面に数百個紐で繋ぎ合わせ、その上に3メートルほどの葦を積み重ねた「浮島」なのです。おおよその寿命が25年という。島は流されないように杭で止めてある。



そのウロス島に上陸?そこに同じトラで作った家屋で、島の人達が生活している。インカの時代から生活は変わらないそうです。島には電気は引かれてないが、太陽光発電が導入されている。この太陽光発電装置は、フジモリ元大統領からの贈り物だそうです。最初に訪れた島から次の島へ渡るについて、トラで作られた二階建ての手漕ぎ舟(34名乗ったが大丈夫)に乗った。料金は1ドルでした。

夫婦でオールを漕いでいたが、夫より妻のほうが馬力があるようだ。運賃の徴収も妻が仕切っていた。子ども達は小学校まで島で暮らし、中高生は陸に上がり勉強するそうです。島では15歳くらいで結婚するそうですが、平均寿命は50歳代だという。

インカの人々は、我々と同じモンゴル系とか。そこにスペイン人フランシスコ・ピサロがやってきて広大なインカ帝国は脆くも破れ去りスペインの支配下となる。そこで、ペルーにはインカとスペイン系の人達が混血しメスティソと呼ばれる人達が40%を占める。因みにインディヘナ(先住民)47%、ヨーロッパ系12%、その他1%。日系人は、ブラジルに次いで多いそうですが、リマに多く居住しているという。

昼食後、近くのフリアカ空港からスター・ペルー機で次の観光先のアレキパへ。飛行機に搭乗後暫くすると、体がなんとなく楽になった。総身に酸素が回ってきた感じです。1時間15分のフライト後アレキパに着いたら嘘のようにあの高山病の症状が消えていた。アレキパは標高2,335mで高山病は全く心配なし。当たり前のことですが酸素は何と有り難いものやら……。 <つづく>



この度は喜寿の祝い戴き感謝申し上げます。今後は無理せず、小さなボランティアに努めます。 2月吉日 権田 晴夫



磯 實さん(右)からはお礼の言葉と写真を頂きました。

平成22年度 菱の実会総会の予告

平成22年度の総会は、4月20日(火)開催の予定で、準備を進めております。詳細は、次号でご案内いたしますので、あらかじめご予約くださるようお願いいたします。

なお、昨年と同じように、会場の一角に『会員趣味の作品展』を展示する予定ですのでご準備下さい。この作品展は、総会前一週間程度展示して、現役の皆さんにも見てもらうことになっております。事務局又は幹事までご連絡をお願いします。

高山彦九郎は太田が生んだ江戸時代の偉大な尊王思想家であり、幕末の志士達に多くの影響を与え、明治維新を導いた先駆者ですがその活躍の場が主に京都や九州などであったこともあり、地元への関心は比較的薄いものがあるようです。また、彦九郎は北海道及び四国を除くほぼ日本全国を精力的に回った偉大な旅行家でもあり、その旅日記は紀行文を中心に、各地の生活・民俗・風土などの社会状況、及び外国船来航・棄捐令・寛政異学の禁止などの政治状況の風聞や、忠義・孝行・節婦などの伝聞、さらには多くの知人との交流の数々を膨大な旅日記にまとめ、後世に伝えた優れた社会活動家でもあります。

その彦九郎が31歳の安永7年(1778年)5月14日に尾島を遊行した貴重な記事が残されています。この記事は、旅中記の多い彼の日記中珍しく郷里にいて墓参・小旅行等のほかは家庭での生活などを記したもので『戊戌季春記事』の題名がついています。以下にその該当部分を現代風に紹介します。なお下の枠内に原文を載せておきますのでご参照ください。

『5月14日夕刻、細谷を出て米沢の庚申塚附近の小川の土橋辺りに着く。細谷の自宅は北北東にあたる。石田川の北側の田島村を西に行き、山王の社(下田島の日吉神社)に着く。鳥居の前には直径80cm位の銀杏の木があり、拝殿は間口三間、宮殿は壱間で玉垣ある、社の後には太さ1m位の松や杉の大木がある。さらに南へ100m位行くと道の左に二間余りの池のようなものがある、山王の御手洗と云う。次に石田川に懸かっている土橋を渡り100mほど

で裏尾島である。さらに西へゆくと諏訪神社が右にある。尾島の本通りに出て右へ行くと哀愍寺があり、山門もある。なお西へ行くと右に天王の社(須賀神社)がある。次に東光寺と云う小さい寺がある、前にお堂及び唐金の仏がある。尾島宿を西へ出て右に諏訪神社(亀岡神社)がある。これよりなお畑の中を西へ行き、左に軽浜(亀岡の小字)を見て過ぎる。安養寺村の不動堂に至る、堂の大きさは横四間に縦五間余で南向きである。東に石の千体仏(国道354号沿いにあり尾島のピラミッドと異名がある)がある、常燈明堂はその前に有り、鐘付き堂もあり門もある。西に明王院の寺が有り。南は大館村、西は出塚村である。帰り道に尾島宿の銭屋酒店で酒を飲む。

主人らしき人に所々への行程を尋ねると主人が答えて曰く、「小泉へ10Km、館林へは20Kmでそれぞれ東方である。太田へは7Km北東である。熊谷へは16Km、前橋へは28Kmである。」しばらくして酒店を出て中沢の店で扇子1本を買う。

主人が私を覚えていて、「寺小屋時代の我らの友達も今は離れ離れとなったり或は死んだ友もいる」と話をする。私は「今在る方へは良く言って細谷へ尋ねて来るよう」と伝言して店を出る。祖母へ土産の為に酒のみ茶碗を買う。東へ出て左の方雷電神社(尾島一丁目)へ寄る。尾島の市は五・十のつく日に開かれ出店数は凡そ百八十店で裏尾島を含めて約二百店である。夜に入った頃、米沢の岩崎老人宅へ寄る。[中略]午後10時頃に細谷へ帰る。』

十四日、晴天也、[中略]晩景に至りて我レ西南の村里に遊行す。先ツ田間を経て米沢庚申の壺丁斗り西の圪橋の辺りへ出ツ、是レより宅へ子丑の間へ当る、是レより西南へ行き岩松の橋の辺りへ出で、こなたより西へ入りて酉戌の方へ行きて田島金なくそへ至る也、また西へ至りて山王也社南に向ふ。鳥井の前右にいてうの壺かい半斗りなる有り、拝殿三間宮殿壺間玉垣あり、社後松杉共に二かい斗りなる有り、南へ壺丁余行きて道の左りに二間余の他の如くなるあり山王のみだらしと号す、圪橋を渡りて壺丁斗りにしてうら尾島なり、是レより西へ行きて諏訪の社右にあり、尾島宿中程に出で、右へ行きてあいめん寺山門あり、猶西へ行きて右に天王の社次に東光寺とて小寺あり、前に堂及びひかな仏あり、宿を西へ出て右に諏訪の社有り、是より猶畑地を西へ行き左りに軽浜を見て過ぐ、安養寺村不動堂に至る、堂の大サ横四間に五間余有り南向き也、東に石の千体仏あり常燈明堂は前に有り鐘堂もあり門あり西に別当明王院の寺有り、南は大館村、西は出塚也、帰へるとて尾島宿銭屋酒店に飲酒し侍る。主しと覚しきに所々への行程を問ふ、答えて日夕、小泉へ二里半館林へ五里各東也、太田へ壺里三十丁良也、熊谷へは四里前橋へは七里となん、しばらくにして出て中沢が所にて扇子壺本を求め侍る、主し我レを覚へて語る、手習の時の朋友も今は離散し、或は死しなとせしよし也。今在る方へは克ク言ひて細谷へ尋ぬへしと伝言し出ツ、祖母公へ土産の為メ酒のみ茶碗を調へ侍る、東へ出て、左りの方雷電の社へ寄る。尾島の市店凡ソ百八十裏迄かけて二百に満たすぞ。時に夜なり。米沢岩崎老人へ寄る。[中略]四ツ時分に細谷へ帰へる、

